

# なのはな通信

第 13号 2004.12



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 久保 知代恵



第十回東葛祭  
横井久美子さんの「青春」をバックに踊る教員たち

## 農の心を持った看護師に

校長 三上 満

新潟中越地震のTV報道は、その災害のひどさ、被災された方々の苦難とともに、それに負けない人びとの感動的な姿を映し出していた。その中に、ある山間の棚田でコシヒカリを作りつづけてきた農家の老夫婦の姿があった。こわされてしまった棚田、地震で流れが変ってしまつて水の出なくなった水路の前に立ちすくみながらも、「来年も何とかして少しでもおいしい棚田の米をつくりたい」ときつぱりと語っていた。

「農の心」という言葉がある。この老農夫の姿にそれを見たような気がした。効率や利潤ばかり考える人なら、「何で苦労の多い棚田で…」と思うだろう。棚田でできる米は最高においしい。昼夜の気温差が大きいため稲は夜の呼吸を止める。つまり稲も夜じっくり休んで体力を蓄え朝からの成長に備えることができる。その分米がおいしくなるのである。そういう損得ぬきの「おいしい米」へのこだわりを持ちつづける心。そこにも「農の心」があるように思った。

学生の地域フィールドでも、農家について農作業をさせてもらう。学生たちは農家の人たちが語る「農の心」に感動する。「自然、作物を愛し、何かあっても人のせいにするようなことはせず、まめまめしく、手を汚して働くことをいとわず前向きに生きる」。農の心とはそういう心なのだろう。「毎日作物が何を欲しがってるかなあって考えて、作物の喜ぶような作業をするのよ」こんな農の心に、学生たちは一様に感動する。

被災地の郵便局。どこの誰がどの避難所に、どのテントにいるかを全部調べて郵便物を配達しつづけているのだそうだ。農業ではないがここにも「農の心」があるような気がする。営利・利潤だけ考えていたら、こんな感動は決して生れないだろう。

私はある時学生たちに「農の心を持つ看護師になろう」と語った。学生が「先生、そりゃいいね」と目を輝かしてくれた。

# 世界大会 in ヒロシマ

## ための記憶と行動の一年に」

平和宣言 広島市長 秋葉 忠利

私達は、今年広島で開催された『原水爆禁止二〇〇四世界大会』に初めて参加しました。

参加する前は、大会がどのようなに進められていくかわからない状態であり、また核被害について無知でした。

大会の中で、広島で被爆した方の発言を聞き原爆による被害は、被爆者だけでなく子孫にまで体の障害として影響を与え続けていることを知りました。一発の原爆で、五十九年経った現在も核被害によって苦しみを続けている。また、インド・パキスタン・カザフスタンなど核実験により被爆者が絶えない状態であることを発言してくれました。世界にこんなにも核被害を受け苦しんでいる人達がいるのに、アメリカによりイラク戦争がはじまり、新たに核被害者を出している。核兵器を作り、使い、それにより被害を受けるのもすべて同じ人間です。どうして人間同士が、解かり合い手を結び平和な世界にならないのかと矛盾を感じました。

大会参加者の青年を対象としたPeaceJamに参加しました。広い会場は中学生から社会人まで若い人達

でうめつくされていきました。全国各地でいろいろな方法で平和を願う活動をしてきた青年の話聞き、一人一人が戦争や核被害で苦しむ人達の思いを知り、過ちを繰り返してはい



けないという被害者の願いを語り承ぎ、平和な世界にしていくのが私達若い世代の役割であると感じました。

大会に参加して、一人の力では小さいかもしれないけれども国境を越

え憎しみや戦争・核兵器のない平和な日が来るように、一人一人が手をつなぎ声をだして平和活動をしていくことが必要だと思います。

(2科2年 秋山 晃子、鈴木 一江)

私達は被爆五十九年目の広島で、3日間たくさんのお話を聞き、学ぶことができました。平和記念資料館で見た戦争の悲惨さ・今まで知らなかった真実や、平和公園内の石碑に刻まれた「安らかに眠ってください。過ちはくり返しませぬから」といった言葉は、私達にとって一様に重く、様々なことを考えるきっかけとなりました。

原水爆禁止世界大会の閉会総会、ピースジャム、平和祈念式で会った人達との交流は、人種や国境・宗教・立場を超えて、世界が大きな平和の流れに向かっていくことを感じさせてくれました。

しかし私達の知りえた知識や理解だけでは、被爆者の方たちが経験した「本当の地獄」の何千分の一の恐怖しか知ることができません。被爆者と同じ苦しみを完璧に理解するこ

# 原水爆禁止2004年

## 「核兵器のない世界を創る」

とはできないのです。私達に出来ることは、知ろうとする事です。想像する事もできます。被爆者の何千分の一という被爆の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぐ事もできます。

そのためには、今までの自分達のように「無知」、「無関心」ではなく、政治や国際情勢に目を向けていることが必要と学ぶ事ができました。

世界にとって核兵器は、大きな問題です。今も世界中に、広島・長崎の何十倍もの威力の核兵器が何千万と存在しています。核兵器と生命の共存はありません。一人一人が「平和」を自分の問題として考えなくてはならないのです。

私達は、被爆者の声を自分の声としてとらえ、身近なところから、積極的に伝えていかなければならないのです。そして、一日でも早く「平和」を叫ばなくても良い世界がくるよう、声をあげていきたいと思えます。

(1科1年 齋藤真弓、島田扶美枝、  
岡田直樹、上條隆介)

8月4日、千葉とはだいぶ体感温度の違う暑い広島に到着し、原水禁の

3日間が始まった。1日目に平和記念資料館を見学し、広島に原子爆弾を投下された日の状況、投下の場所に広島が選ばれた理由、原子爆弾による被害や、放射線の影響など、さまざまなことを改めて学ぶ事ができた。2日目の分科会では船に乗り、呉湾をめぐり、いくつもある爆弾庫や潜水艦を見学した。実際に見ると、本当にこの場所からイラクへ爆弾が運ばれているんだということが実感できた。それは、身勝手なアメリカの戦争に、日本が協力していることを意味する。そして、これらのアメリカのためにある施設には私たちの莫大な税金が投入されている。一方で、診療報酬が削られ、医療費の患者負担が増加し、消費税も上げられている。日本人の私たちの生活は貧困になるばかりだというのに・・・なにかがおかしいと思わずにはいられなかった。PeaceJapでは平和を願う若者達が全国でがんばっている活動をあつく報告していた。そして、ジャーナリストの森住さんの講演では、胸がつまる思いがして、涙がでてしまった。イラクの生の現状を写

真で報告してくれたのだが、放射能汚染地区を裸足で遊ぶ子ども達や、無脳症の赤ちゃんの写真を次々に見せられたからだ。イラク戦争が起これなければ劣化ウラン弾も使用されず、こんな悲惨な現状は生れない。この子ども達は、テロリストでもないし、大量破壊兵器を作ったわけでもないのに、イラク戦争の犠牲になつていく。戦争というのはこういうことなのだと思つた。罪のない一般の人々が大量に殺されることなのだ、と。

でも、悲観してばかりはいられない。平和でなければ人間的に豊に生きていくことはできない。戦争を知らない私たちは、平和の尊さをとすると忘れがちである。しかし、今の日本は確実に戦争への道を歩み始めている。その実感のないまま、知らないうちに戦争ができる国になつていくのではないよう、世界中の平和を願う人々と手をつなぎ、私たちの手で平和を作り上げて行きたいと思う。

(専任教員 白倉智美)

# 第10回 東葛祭

## 「新鮮東葛組 10th アニバーサリー」

第十回目東葛祭が十月八日、十日

に開催されました。テーマは「新鮮東葛組10thアニバーサリー」。学校祭を地域の方と共に作り上げていくという思いと九年間の伝統を引き継ぎつつ、新たな気持ちで新しい事に挑戦していこうという意味を込めました。

しかし1科3年生は研修旅行、2科2年生・1科2年生は実習があり全体で集まり話し合いをし、準備を進めていくことは大変でした。そんな中、両科1年生が中心となって準備を進めてくれました。

初日は両科5クラスから学びの報



告があり、日頃の学びの一端を共有しました。そして第十回ブレ企画としてシンガーソングライターの横井久美子さんをお招きし「横井久美子・平和をうたう」というテーマで体育室でコンサートをして頂きました。三人のバンドメンバーとともに素晴らしい歌声を披露して頂き、学生も地域の方も感動しました。

また毎年人気のお化け屋敷や歌う



手話、出店・食堂、フリーマーケット、子ども向けアトラクションなどもあり、盛り上がりました。今年から「東葛祭の歩み・映画鑑賞」企画が加わりました。新企画のため準備は苦労しましたが、当日はたくさんの方が来てくれました。東葛祭の歴史を知る良い機会にもなりました。

今年東葛祭史上初、台風直撃による開催日延期というハプニングがあり、来校者が減少してしまうのではと心配しましたが、多くの地域の方や患者さんが来てくださり、支えられていると実感しました。

東葛祭は今年で十回という節目を迎えました。成功したのは地域の方をはじめ、両科の垣根を越えた学生同士の協力があったからだと思えます。来年はいよいよ学校も東葛祭も十周年を迎えます。今まで積み重ねてきた歴史・伝統を振り返り、そして力にし、素晴らしい東葛祭にしたいと思えます。

（第十回東葛祭実行委員  
足立詩織、上畑智愛、千葉亜耶子）

東葛祭の一日目にシンガーソングライターである横井久美子さんのコンサートを鑑賞しました。音楽が好きな私はこの日を楽しみにしていたので、音楽機材が運び込まれた体育館に入った時の雰囲気にとドキキしたことを覚えています。私が印象に残っていることは、横井さんが歌うように話す人だと思ったことと、

歌詞が素敵だったので、思わず感情移入していろいろな思いに浸ってしまつたことです。音楽家であり母親でもある横井さんの歌は、今の社会や人生の途上でのさまざまな出来事を歌にっていて、心に響くものばかりでした。二〇〇一年を忘れられない年になると言い、世界中の子どもたちに平和に生きてもらいたい、戦場で育ち飢餓や戦争で死んでいく子どもたちをなくしたいと思つても何もしない自分と出会い、その時の気持ちから歌が生まれたと話してくださつた歌が強く心に残っています。イラク戦争や自衛隊派遣が行われている中でも、物が満ちあふれ豊かな国である日本ですが、心が貧しい国にならないといいなと思ひました。物騒な事件が当たり前のように日常茶飯事報道される日本で平和とは何かと考えさせられました。

(1科2年生 坪田 和佳)

## 圧巻！踊る先生たち

昨日、千葉県流山市にある東葛看護専門学校の「第十回東葛祭」で歌いました。

会場は、専門学校の体育館。マイクのすぐ前には、学生が座り込み、その後ろには、近隣からの「大人」のお客様たち。

最初、このコンサートを依頼された時、3つの申し入れがありました。

『私の愛した街』を必ず歌つてほしい』『わが大地の歌』を学生に教えてほしい』『横井さんの歌う『青春』をバックに先生たちが踊りたい』

私は、久しぶりに若い聴衆なので、記念コンサートの安田、劉、杉田の記念バンドで臨みました。歌い始めると最初から結構、反応が良くて私も好調。4曲目で「私に人生と言えるものがあるなら」を、校長の三上満先生にマイクをむけ歌っていたら、学生から歓声が、「わが大地

のうた」を丁寧に覚えてもらつたあと、いよいよ先生達の登場。十二、三人の先生が、「青春」をバックに踊るんですよ。もう会場いっぱい爆



笑、爆笑でした。

私は、「目上」の人間が「目下」の人たちの前でバカができる組織、団体こそ「しめつけや抑圧」から一

番遠く、自由で対等平等な人間関係を生み出すと思つてきました。その

「模範」をこの目で見たのです。もちろん、様々な問題を抱えている現代の若者を相手に、先生方も日々大変な苦労があるでしょう。でも、先生方のあの踊る姿から、私は「確かな知識・技術を身につけ、愛にみちた心豊かな看護師を育てる」「どんな場合でも、学生を深く信頼し、暖かい励ましを送り続ける」この学校の熱い精神が伝わってきたのです。

「この学校の生徒は幸せ」。そして、そんな学校で歌わせていただいた私も幸せな一日でした。

横井 久美子

二〇〇四年十月九日

『KUMIKO Report』

より転載

先生たちは猛練習をして「バカ」を演じるゆとりはなく大真面目だったのですが!! (教員の声)

## 講演と映画と星をみる夕べ

ことし9月下旬、東葛看護専門学校で行われた公開講座『宮沢賢治―銀河からの声―』（二上満校長講演）で、スライドを織り交ぜて星や星座のお話をする機会があった。

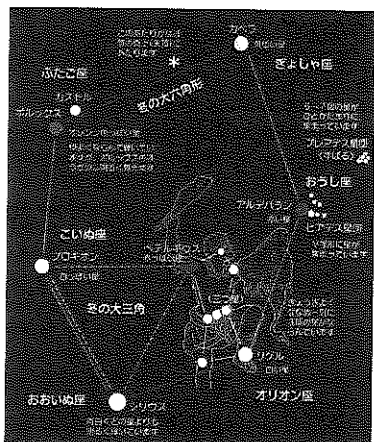
初秋といっても、夕方の空に「夏の大三角」（デネブ、ベガ、アルタイル）がまだ楽しめる頃だった。誰でも知っている七夕の星―織姫星と彦星、そして白鳥座と話をすすめ、『銀河鉄道の夜』の中で、賢治が「サファイアとトパーズ」と、絶賛するアルビレオ（白鳥のくちばし）の二重星の輝きや、私たちの銀河系―直径十萬光年の「天の川銀河」の話や想像図（写真に撮れない！）と、その他の銀河をスライドでみながら一緒に楽しんだ。アンドロメダ銀河は二三〇萬光年の彼方から光を届けていること、アンドロメダ座とカシオペア座にまつわる話、カシオペア座からの北極星の見つけ方なども紹介した。シリウスをはじめ、あの時みんなが予習した「冬のダイヤモンド（大六角形）」が、これから目につく季節だ。オリオン座の赤い巨星ベテルギウスや青い巨星リゲル、一〇〇〇年も前に清少納言が『枕草子』に「星は昴（すばる）」と綴ったブレアデス星団のほか、この冬はカストル・ポルクスのふたご座

に土星が加わり、三兄弟が楽しめる。

「ビッグバン」から数えて宇宙は一三七億歳。およそ五〇億歳になると地球付近にまで膨脹、やがて爆発して白色矮星になるといふ。たまたま同じ頃アンドロメダ銀河とわが銀河系が衝突することなど、静かなように見える宇宙もダイナミックに運動をしている一例としてシミュレーション画像で紹介した。

ギリシヤ神話に出てくる名医アスクレピウス（へびつかい座）と、西洋医学の祖といわれるヒポクラテスとの関係など、私自身、このたびのお話の準備の中で「教えることは学ぶこと」を実感した。スライドの編集と上映には東葛病院と東葛看護専門学校の職員の方々にたいへんお手数をおかけした。この場をお借りして感謝を申し上げます。

東葛病院 医療と健康を守る会  
副会長 加賀谷昭



## 第7期学生自治会

みなさんは、いまの授業や実習、設備など、学校生活で不満に思ったり、「何とかならないのか」と感じたりすることはありませんか？じつは私のまわりでも、「ロッカーが狭くて使いづらい」「授業がわかりにくい」などの声がよく出ています。

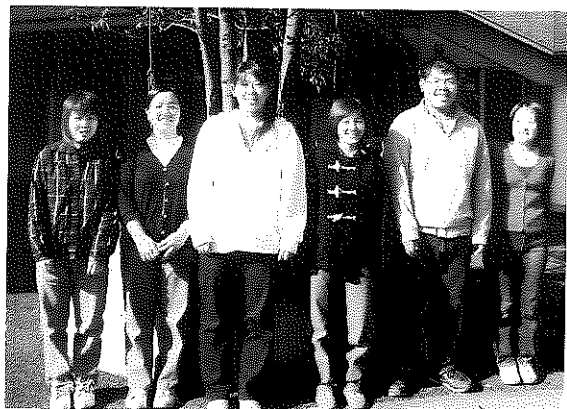
最近、「自治会とは何か？」というテーマで学習会をして、そこで初めて知ったのですが、全国の学生自治会では学生一人ひとりの願いや悩みから出発して、アンケートの声をもとに、食堂を改装したり、授業料値上げを阻止したり、カリキュラムを改善したりしているそうです。また全国の学生の願いを集めるということと、JRの学割や、青春18切符、奨学金無利子枠の拡充なども実現してきたということを学びました。学生みんなの声があつまれば、勉強や実習、学生生活を、もつともっと充実したものにかえていくことができると思いました。

私もふくめて自治会未経験者ばかりですが、さっそくアンケートで、みなさんの「なんとかしてほしい」「こんなことやってほしい」という声

をあつめていきたいと思えます。ご協力よろしくお願ひします。また、みんなの声を反映できるように、スタップもふやしていきたいと思えます。金曜日の昼休みに会議をしますので、お気軽に声をかけてください。

（自治会会長 三島 ひろえ）

|      |                              |
|------|------------------------------|
| 会 長  | 三島ひろえ（1-1-1）                 |
| 副会長  | 岡田 直樹（1-1-1）                 |
| 書 記  | 蓮場都美子（1-1-2）                 |
| 会 計  | 安保佳菜子（1-1-2）                 |
| 会計監査 | 菅野 祥子（1-1-1）<br>熊本 恵美（1-1-1） |



看護1科1年生  
(10期生)

## キャッピング セレモニー

2004

十一月二十七日、「入学してから基礎Ⅱ実習までの学びをふまえて、クラス全員で看護師になる決意を確認する場」としてのキャッピングセレモニーが行われました。

このセレモニーに向けて、十一月十二、十三日に学校で合宿し、目標を「決意を固める為にお互いを尊重し発言できる雰囲気を作る」と決め、実行委員を中心にクラス討議を進めてきました。そして、出来上がった決意文。

実習での具体的な場面を紹介しながら「継続する事の大切さ」「患者さんを受け止める」「患者さん一人一人に合ったケアを考える」「患者さんを



取り巻く背景」についての学びを発表しました。

そして、「患者さんへの看護技術を行うときは、技術の基礎が身につけていないと患者さんにあつた技術を考えていく事が出来ないし、患者さんに苦痛を与えてしまいます。学内演習で行っていたときはわかつていたつもり

でしたが、実際に患者さんを目の前にすると戸惑ってしまった、自分のものになっていなかったのだと気付きました。また、医療知識を身につけないと、自分は見ているつもりでもポイントが明確にならず、ただ見ているだけというようになり、患者さんの容態の変化に気がつく事が出来ません。今後、更に患者さんに合った看護ができるように日々の授業を真剣に取り組み、病態の学びを深めていきたいと思います。

実習で患者さんに初めて接し、患者さんの笑顔や言葉に励まされ、喜びを感じました。看護師になりたいという夢が看護師になるのだという自覚が変わりました。その為には自分は何が足りないか、クラスでどうして行くべきかが見えてきました。

私達は、このクラスでいい仲間に出会いました。互いに意見を共有し、良い所は認め合い、悪い所は指摘し

あつて、励まし合いながら不安なことや課題を一つ一つ乗り越え、人として成長していきます。」

と決意しました。四十三名真新しいキャップをかぶった1科10期生の顔はどの顔も輝いていました。

(1科1年生担任 下 紀子)



## 8ヶ月間の学び

「生命活動」

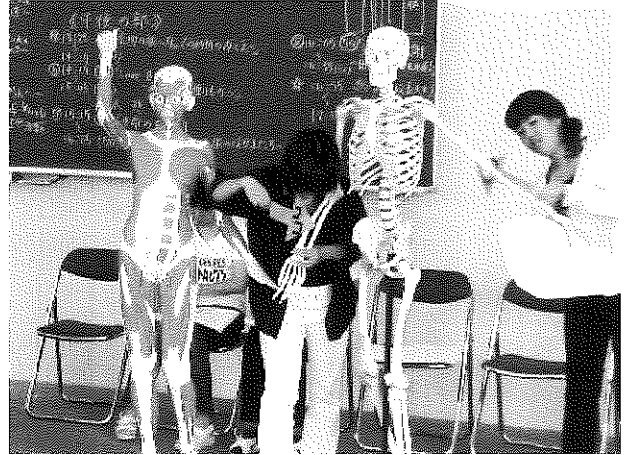
「在宅看護論

フィールドワーク」

### 生命活動からの学び

私達は生命活動の学びで、生物の進化の歴史から学び始めました。そして人間の身体を8つの系にわけ、グループ、クラス全体で学び合いました。人間の身体の働きは部分ではなく、全体の諸器官がつながりあって働いているということがわかりました。そして、私達の身体のおしくみには、たくましくすばらしい健康の力があることを学びました。私達のグループは、脳神経について調べました。始めは「脳神経、難しそう、どうしよう」と皆も表情が硬く緊張していました。

私達には素晴らしい感覚器があります。例えば、生れてから脳に刺激を与えることで、神経回路網は働きはじめます。刺激を与える



と、それに反応するニューロンの樹状突起がどんどん増え豊かな人間の脳に育つていきます。また、脳の細胞は年をとると減っていきませんが、学習することにより、樹状突起は増加し、伸びていき発達することも知りました。

私達は生命活動の学びを通じて、知識が認識となり自分自身のニューロンもつなげる事が出来たと実感しました。またグループでの学びは困難もあつたが共有する大切さも学べ

ました。これからもグループの学びを大事にし、実習や臨床につなげていきたいと思っています。

(2科1年 前田 紗也香)

### 在宅看護総論・

#### 在宅フィールドからの学び

在宅フィールドで訪問させて頂いたKさんは、八十六歳の女性でアルツハイマー型の痴呆、寝たきりの方でした。「高齢者だし、痴呆症もあるし、楽しい・悲しい・恥ずかしいなどの感情や意思は見られないだろう」「会話なんて殆ど無理なんだろうな」と勝手に思い込んでいました。

しかし4回の訪問を通して、家族の方や私達学生に対して、楽しさ・恥ずかしさなど様々な感情や意志を表現して下さいました。そして話ばかり合わなくても、何か特別な事をしてあげられなくても、「会話」は出来る事を学びました。「高齢者だから」「痴呆だから」というだけで勝手に抱いていた誤った考えを改め「ありのままのKさん」を知る事が出来ました。人間は皆一人一人違い



(2科1年 千葉 かおる)



## 領域別実習

「着実な前進」

1科9期生は、九月一日から十月十五日までの一ヶ月半、老年・在宅実習を行いました。

みさと協立病院の療養病棟・自宅を療養生活をおくっている方・老人保健施設「まくはりの郷」、特別養護老人ホーム「葛飾やすらぎの郷」、グループホーム「わたしの家」、訪問看護ステーションと様々な場所で、豊かな経験をさせていただきました。

療養病棟では、痴呆の患者さんからあびせられた「暴言」を「症状」として捉えられず、わかっついていて、あえて言っているように思い、実習が終っても辛いと悩み、ゼミで話し合いをしました。その中で「暴言を吐きたかったのではなく、何か伝えなかったのではないか。痴呆にならなくてなる人はいない。私たちも人間

なので、拒否されたり、暴言を吐かれると傷つく。疾患や生活背景を頭に入れておかないと、その都度動揺し、正しい観察ができなくなるのではないか。痴呆症状には、その人の生き様が映し出されてくる。一人の人として人生に寄り添うことが大切なのではないか」と学び合いました。

在宅実習では、今まで以上に「生活者」としての姿や家族の思いがみえ、利用者を尊重し、優先することの大切さを実感しました。

ある外傷性頸髄損傷の利用者さんは、生活保護を受けながら、訪問看護やヘルパーの応援で独居生活を送り、プールや図書館、サッカー観戦にも行きたいと要求を持ち、実現するために市と交渉しているというのを知り、遅く生きる姿に驚き、障害者観を大きくくつがえされました。

生きる権利を勝ちとってきたことを実感すると同時に、闘わなければ、あたりまえの生活が営めない現在の社会保障制度のあり方に、怒りと疑問を抱き、自分たちが制度を学ぶ意義を再認識しました。また「闘う看

護師になって下さい」という利用者さんからの言葉を糧に、社会保障ゼミナールでも社会の矛盾とあるべき

姿を学び合い、少しずつ視野を広げ、成長を続けています。

(1科2年担任 小淵 尚子)



# 平和と医療」を学ぶ 研修旅行

## 1科3年生（8期生）

私達1科8期生はベトナムのハノイに研修旅行に行ってきました。始めはクラスで話し合いの時に他の事をしている人がいたり、話しをしている人もいて、クラスのまとまりに欠け、旅行に行く前から様々な不安があり、研修旅行委員の中では心配が多くありました。しかし、ベトナムで第二次世界大戦で日本が侵略したためベトナムの方々が二百万人も餓死したことや、アメリカによるベトナム侵略戦争時のホ



アロー刑務所跡に行き、レポートを発表することでクラス全体で学びを深められました。二百万人餓死は、日本がおこした事なのに日本では教科書はもちろん、殆どが知らされていなく、明らかにされていけません。日本政府が日本にとって不利な事を隠している為なのかと考えました。謝罪もしないで、このまま外交関係を続けるのは良いことではありません。日本は他の国と友好関係を築くためには、教育にきちんとした歴史の事実を取り入れていくべきではないのかと学ぶことができました。また、平和村を訪れ、今だに枯葉剤の影響で身体に障害のある子供達と交流したことで、戦争と平和についてもクラス全体で話し合い学ぶ事もできました。子供達の傷や障害は敵に復讐したからといって治るものではない。ベトナム戦争時、ホアロー刑務所に捕えられていたアメリカの捕虜に対してベトナムの人たちは人道的な配慮をしながら、独立を目指し戦い続けたことを知りました。そこから、誰も傷つけることなく悲しみのない平和を叫ぶ必要があると感じました。今憲法九条が変わろうとしている日本。憲法九条が変わらうとしている日本。戦争という同じ過ちを繰り返してしまいます。憲法九条



を変える前に日本は世界の先頭に立つて平和を呼びかけていく必要があるのではないかと思いました。ベトナムへ行き、クラスの中から「良かった。楽しかった。改めて医療と平和について学ぶ事ができた。」という声があがり、より深い学びの多い旅行にする事ができたのではないかと思いました。ベトナムに行き、学んだことを大切に自分達の平和、世界の平和について、これからも目を向けていきたいです。

（1科8期生 八文字 美穂

古田 佳奈）

# ベトナム 「日本国憲法と 韓 国

## 2科2年生（9期生）

私達2科9期生は各論実習の中、三上校長の学習会を含め、歴史上一番身近な国でありながら過去に侵略をし（大和朝廷、豊臣秀吉、大日本帝国）大勢の犠牲者を出した韓国に行き先を決めた。韓国と日本の歴史を学習する中で、韓国併合と称する日本の植民地政策による朝鮮人民の人権剥奪、弾圧、強制連行、「日本軍慰安婦」など日本の歴史で学べなかった事実に驚くばかりでした。そして、不安と期待を胸に私達は成田より一路ソウルを目指しました。以前、韓国は独裁軍事国家でしたが八〇年代軍政が敗れ民主化が進み労働組合も認められました。そしてその中で発生する労働災害と闘う労働者、地域住民によって一九九九年創設された働く者の医療機関源進緑色病院を訪ねました。日本の民医連と友好関係にあり、朴理事長自ら東葛病院にも視察に来ており日本語で歓迎をうけました。歓迎挨拶は日本国憲法第9条の改悪の動きに触れ韓国の人々が大きな関心を持っている事を知りました。

2日目には、元日本軍慰安婦に正式に謝罪、賠償をしていない日本政府に対し

での抗議集会（毎週水曜日に日本大使館前で開かれている）第六二七回に参加しました。雨の日も雪の日も高齢のハルモニたちが訴えているにもかかわらず日本政府は謝罪もしないことに憤りを感じました。3日目に訪問したナムムの家で証言していただいたハルモニは「私達は命が短いのです。早く謝罪をしてほしい。そして、日本の青年達が心配です。」と今の日本の動きをとんでも危惧していました。また植民地時代、大日本帝国に対する独立活動家を弾圧収容した西大門刑務所跡では犠牲者による日本兵の拷問を再現していました。そこに見学に来ていた韓国の小学生の目が冷たく感じてしまう



程衝撃的でした。

今回の研修旅行で、日本が天皇の命令のもとにおこした侵略戦争が多くのアジアの人々を犠牲にしその上に日本国憲法がある。しかし憲法第九条が今存続の危機にあることを学びました。自衛隊のイラク派兵は私達の問題であり他人事ではなく米国の侵略戦争への参加になってしまいます。今後私達は看護師として医療の前提である憲法第九条を守り、二十五条の健康で文化的な生活の維持、発展に励むことを学んだ研修旅行でした。

（2科9期生 研修旅行委員長

柳田 雅彦）



## 二〇〇四年度臨床指導者研修会 テーマ「臨床における看護展開の 具体的実践事例から学び、我々の 目指す看護展開について考える」

民医連看護の3つの視点・「患者の立場に立ち・患者の要求から出発し・患者と共に闘う看護」という理念が臨床においてどう実践されているのかを技術・理論・理念の側面から検証するための第一歩として、現状についての共通認識をもつことが今回の研修会の到達目標でした。

学校における看護展開の授業内容について紹介した後、学生の受け持ったケースを中心に4院所から事例報告と検討及び谷川医師による「医師研修の今日的課題」の講演と併せて患者の立場に立った民主的集団医療を実現するための職場づくり、看護師の役割について総合的に検討しました。参加者からの感想を紹介します。

「学生の臨床実習の受け入れに当たって、学生をスタッフの一員として位置付けオープンに学びあい、共に展開していききたい。そのためにも、学生と共に学び合える職場づくりが

大事。忙しい・余裕がないを乗り越えて、現場の看護師自身が楽しみ・感動し・充実感を持って働ける職場にしていきたい。」

「また『患者の要求から出発する看護』が実践できているのか・理念の具現化をどう進めていくのか・職場全体の課題としていきたい。」

「厳しい医療情勢のなかでも学生の学ぶ職場づくりを病院ぐるみで進めていこうとする熱意が伝わってくる研修会でした。」

(看護第1科教務主任 石倉 啓子)

### 第1回地協看護教員交流会

全日本民医連の看護学校は、8校あります。民医連の学校として相互に研鑽しあい、教育力量を高めるため交流を山梨の共立高等看護学院と行うことになりました。今年度は、基礎看護学の交流とし、看護総論・臨床実習・看護展開の授業展開及び臨床実習について実践交流を行いました。交流する中で「基本的人権擁護の立場に立つ看護」を命題とした教育実践展開を改めてまとめ整理する事で学びや確信に繋がりました。

そして、患者の事実(病態及び生活史)から出発する看護実践から人間観・患者観・医療観を発展させる学びの重要性を実感しました。その中で教員の課題として、学生に病態を総合的にとらえさせること、事実をありのままにつかむ力をどのように応援したらよいかなど困難さもいただきました。教員も患者・学生に学びながら発展していく事の大切さを実感しました。夕食交流会では、日頃の労をねぎらい、明日への活力となり、大成功に終わりました。

(看護第2科教務主任 松原 郁子)



## 編集後記

十月、2科9期生の韓国研修旅行に同行しました。韓国の病院の朴理事長、元日本軍「従軍慰安婦」のハルモニが日本国憲法第九条は大丈夫ですかと強い懸念を問いかけてくれました。日本の植民地時代の刑務所跡地やハルモニ達の住いには韓国の子どもや高校生がたくさん学習にきていました。歴史の真実に基づく教育を受けている青年と日本史から侵略の歴史を隠す教育を強いられる青年では、世界平和を構築していく上でなんとという相違なのでしょうか。

日本では「韓流ブーム」でソウルにはたくさん日本人観光客が訪れていました。文化の交流が歴史観においても共通の力をもつよう、今私たちは未来のために真実の歴史を学ぶべきではないでしょうか。アジアの人々への平和の誓いとして。

なのはな通信編集委員会

山田かおる、徳丸美津子、久保知代恵